

移民経験をめぐる語りの戦略と重層的リアリティ

—タイ北部農村における帰国者を事例に—

松井智子

I. 先行研究と本論文の位置づけ

現代移民の特徴の一つとして、彼らが必ずしも移住先社会に定住せず、出身地社会に戻ったり、移動を繰り返したりすることが指摘されて久しい。では、このようにして「帰国」した移民は、出身地社会において自らの移民経験をどのように語っているのだろうか。本論文は、タイ北部のある農村における帰国した現代移民のライフヒストリーの語りをとりあげ、特に帰国後に直面する出身地域の社会的文脈と、帰国者個人個人の語りの戦略が取り結ぶ相互作用に注目して、その重層的リアリティを描き出すものである。具体的には、日本から帰国した帰国者のプロフィールを踏まえた上で、帰国者がどんな視線で村側の社会に迎えられ、その視線に対抗してどんな戦略でリアリティを構築しようとしているのかを明らかにする、それによって、移民という経験が移住先社会との相互作用だけではなく、出身した社会との相互作用としても重層的に構築されていることを示す。

移住先から帰国した移民たちは、出身の地域社会において、自らの移民経験をどのように語っているのか。このような問題関心の背景には、いわゆるグローバリゼーションの下、国境を越える移民労働者が量的に増大し、また従来の移民とは質的にも変化しているという状況がある。現代移民の特徴の一つとして、彼らが必ずしも移住先社会に定住せず、出身の社会に戻ったり、移動を繰り返したりすることが指摘されている(山本[1996: 127])が、こうした移民現象

の質的な転換を前に、移民研究や移民政策においてこれまで支配的であった同化理論というパラダイムは修正を迫られている。すなわち、移民現象を二国間における一方向的な脱出として捉え、いずれ移住先社会に同化する「移住者」として移民を捉える仕方はもはや機能しなくなっており、現代移民を捉える新たなパラダイムが求められているといえる。

そのため、今日では国際労働移動研究や移民研究等の分野において、移住先社会への定住を必ずしも前提としない一時的な移民労働者や、移住先と出身地とをつなぐネットワーク上で移動を繰り返す移民、移住先社会に同化せずエスニック集団化する移民などの存在が注目され、一定の成果を収めている。

しかし、従来の研究は、次のような二つの焦点に分断されがちであると考えられる。一つは、移民の属性や実態的データから、移民の移動パターンを析出しようとする研究であり、もう一つは、移民のアイデンティティや意識調査から、移民の適応/異化プロセスを解明しようとする移民コミュニティ(またはエスニック・コミュニティ)研究である。例えば、前者としては、Castles&Miller [1993=1996]の「移住プロセスの4段階」論や、Massey et al.[1998]による「国際人口移動プロセスにおける6つの法則」が挙げられる。後者としては、Glick Schiller et al.[1994]によるトランスナショナル・コミュニティに関する研究や、日本における都市社会学的なエスニック・コミュニティ研究(奥田[1994],広田

[1997], 田嶋[1998])などが挙げられる。

このように分断された従来の研究状況は、次のような要因によるのではないだろうか。第一に、移動パターンを焦点とする研究が、移民のリアリティという側面については問題としてこなかったこと。第二に、適応／異化プロセスを焦点とする研究が、移民の主観的側面を扱いつつも、移動パターンなどの実態的側面については捨象するか、あるいは主観的側面と実態的側面の一対一対応関係を前提としがちであったことである。つまり、従来の研究では、現代移民のある特定の移動パターンとある特定の適応／異化プロセスとが、一対一に対応するものとして描かれがちであった。

本論文では、現代移民の移民経験をめぐるリアリティを、移動パターンなどの実態的側面とはひとまず独立して論じ、構築されるリアリティと実態とのズレに着目し、その意味を考えたい。すなわち、移民が語ったことを「事実」として素朴に捉えるのではなく、語られたことの文脈性を捉える。このように、出身の社会における文脈と個人個人の語りとの相互作用に注目して、その重層的リアリティを描き出すことによって、現代の移民現象における主観／客観の入り組んだ関係を明らかにする試みのひとつとしたい。

II. 日本から帰国した移民

II.1. 在日タイ人概観

まず在日タイ人を統計から概観しよう。

日本におけるタイ人入国者数は1980年代半ばから増加し始め、1991年にピークに達し、1995年以降は全体としてはゆるやかな増加傾向を示している(雨宮他[2002: 21])。在留資格別のタイ国籍者外国人登録者数の推移をみると、2002年では総数3万3,736人、在留資格別でみると、「日本人の配偶者等」1万2,838人、「永住」3,913人、「観光」3,750人となっている。男女比は、

外国人登録者数では女性のほうが7対3の割合で多い(雨宮他[2002: 23])⁽¹⁾。一方、不法残留者数は、1993年に5万5,383人でピークを迎えてから減少しているものの、2001年では1万9,500人、国別不法残留者数の上位4位に入っている。

地理的な分布をみると、タイ国籍者外国人登録者数の多い上位5県は東京4,301人、茨城4,272人、千葉4,082人、神奈川3,059人、長野1,931人となっている。茨城県、千葉県は1990年代以降その数が急増しており、東京都との開きは年々小さくなっている。特に茨城県は増加率が最も大きく、人口比でみると全国で最もタイ人が集中しているという(雨宮他[2002: 28])。彼らの集いの場となるのは、タイ食材店やエスニック・レストラン、カラオケスナックなどであるが、稲葉[2002: 32-34]によれば、こうした場で知人間の助け合いはみられるものの、互助組織が機能するような集住地域や結社活動などは見られないという。

以上はあくまでも平均的な像で、移住者が全て同じ状況にあるわけではない。だが、平均的な像であるがゆえに、出身社会からのステレオタイプ化された視線とは密接に関連すると考えられる。

II.2. パヤオ県ドークカムタイ郡の日本からの帰国者12人のプロフィール

調査地となった、タイ北部に位置するパヤオ県ドークカムタイ郡 (Amphoe Dok Kham Tai, Changwat Phayao) のある行政村 (Tambon)⁽²⁾ は、米・トウモロコシ・大豆・果物などの栽培が行われている農村地帯であると同時に、バンコクなどタイ国内の都市部及び日本・台湾・韓国・シンガポール・サウジアラビア・イラクなど海外への移民労働者が多い地域でもある。

この村に暮らす日本からの帰国者12人⁽³⁾は、1977年生まれ (調査当時22歳) から1955年生まれ (同45歳) までの男女 (女性10人、男性2人)

である。彼らが日本へ渡航したのは、1988年～2000年までの間で、滞在期間は2年～12年、平均5.7年である。滞在資格については明言を避ける人が多かったが、多くは短期滞在ビザ（30日～90日）で入国し、オーバーステイとなった人々であると考えられる。

学歴をみると、就学経験のない人が1人、小学校4～7年卒⁹9人、中学校卒1人、大学中退者が1人であり、小卒程度の低学歴者がほとんどである。結婚についてみると、既婚者（村に配偶者と子がいる人）4人、独身者が8人である。既婚者のうち、男性2人は渡航前に既に村に妻子があり、女性2人は帰国後に村で結婚している。女性は全て渡航前は独身で、未婚または離婚経験者である。また、独身女性のうち4人がTJC（日本人男性との間に生まれたタイ・ジャパニーズ・チルドレン）をもつ。

日本への渡航以前の国内外での労働経験は、「あり」10人（バンコク9人、その他の県1人、外国1人）、「なし」2人であり、そのほとんどがバンコクなど国内都市での労働を経験したのち、日本へ渡航するというパターンである。その一方で、初めて村を出て働いた先が日本であ

ったという例がみられたことも興味深い。彼らのバンコクでの職は、工場労働、サービス業、家政婦、屋台、親戚の店の手伝いである。バンコク以外では、南部の県で工場労働を経験した女性があった。日本以外の外国で労働を経験したのは、イラクでトラック運転手をしていた男性である。この村には台湾・韓国・シンガポール・マカオ・オーストラリア・サウジアラビアへの移民経験者もみられ、この男性のイラクでの就労は特殊なわけではない。

彼らは日本ではどのような仕事をしていただろうか。主な職をみると、スナックや居酒屋、焼肉屋などでのサービス業が8人、管理売春と思われる例が2人、建設労働が2人である。成田に到着後、日本で最初に滞在・就労した都道府県をみると、茨城県3人、栃木県2人、千葉県2人、東京都2人、神奈川県1人、長野県1人、愛知県1人である。来日後まず茨城県と栃木県で就労した5人は全て、スナック等でのサービス業や性産業に従事した女性たちであることから、両県に何らかのつてをもつ斡旋業者がこの村と関わっている時期があったとも考えられる。

事例	年齢・性別	送金額(円/月)	使 途
A	22歳女性	15～20万	両親等の生活費、両親の家と自分の家の新築、自分の貯金
B	28歳女性	7～9万	両親等の生活費、妹の教育費、家の新築、自分の貯金
C	29歳女性	3万	両親等の生活費、自分の貯金
D	30歳女性	10万	自分の貯金（洋裁学校の学費）
E	33歳女性	送金せず貯金	—
F	34歳女性	6～9万	両親等の生活費、農地と耕作機の購入、家の新築、自分の貯金
G	35歳女性	10～15万	親兄弟の借金返済、両親と子の生活費、子の教育費、家の新築
H	35歳女性	頻繁に送金 (金額不明)	両親の借金返済、両親等の生活費、家の新築
I	35歳女性	5万	渡航費のための借金返済、両親等の生活費
J	38歳男性	9～12万	義父母の家の新築、農地購入
K	41歳女性	送金せず	—
L	45歳男性	15万	妻子の生活費、母の生活費、家の新築

表1 日本からの帰国者12人の送金額とその用途

(出典) 筆者作成

送金についてはどうだろうか。表1は、12人の送金額とその用途をまとめたものである。村に家族がいないために送金義務のないEを除くと、送金していないのは1人だけで、その他の10人は毎月もしくは3ヶ月に一度というように定期的に送金している。金額をみると、毎月3万~9万円が4人、10万円以上が5人近くいる(金額不明1人)。主な用途は、村で暮らす親兄弟や妻子の生活費、子の教育費、家屋の新築である。農業投資に充てたのは2人である。

帰国後の職をみると、無職3人、日雇い農2人、自小作農5人、その他2人である。その他2人は、村内で洋裁とタクシー運転手を仕事としており、どちらも日本での稼ぎを元手に始めている。

Ⅲ. 以降では、このうち3人、A(22歳女性)、G(35歳女性)、K(41歳女性)を特に取り上げたい。この三人の語りは特に村側の視線との間で揺れ動き、ある落ち着いた悪さを見せる。だが、それは彼女らが村側の視線と相互作用を持ちつつ、独自のリアリティ構築を図っているからでもある。その意味で、移民経験をめぐる重層的リアリティを追跡する格好の素材となっている。

Ⅱ.3. 村側の視線

1997年にバヤオ県で、人身売買の被害を受けた帰国者女性グループを調査し、彼女らの7年後を追跡調査した齊藤[2004]は、帰国後の問題として、帰国者を迎え入れる地域社会の側の問題を次のように述べている。

「望郷の念を抱いて故郷に戻っても、日本からの帰国が目に見える経済的効果を家族にもたらさないとき、家族や地域から蔑視されることも少なくない。…特に10代半ばから性産業に従事してきた女性が日本から帰国した場合、主に二つの大きな障害にぶ

つかる。一つ目はセックスワーク(性関連産業の仕事)や結婚以外に生活基盤を築く機会が非常に限られていること。二つ目はセックスワーカーとして社会的に『悪い女』という烙印を押されるために、自己肯定感をはぐくむ機会をなかなか持てないことである。自己肯定感が希薄な女性たちは、自分で自分を肯定するため、また家族や地域に受け入れられようと、経済的な力を得ることに向かう」(齊藤[2004: 66])

このように、日本から帰国した女性たちには、故郷である地域社会から、ある特定の差別的なまなざしが向けられるという。一つはセックスワーカーに対するまなざし、もう一つは「失敗した」帰国者に対するまなざしであるといえる。2000年には、チェンライ県で、人身売買被害の当事者による運動^⑥が立ち上がり、「自分たちを人身売買に追いやった拝金主義、女性の自己犠牲奨励など地域社会に蔓延する価値観の見直し」(齊藤[2004: 68])に取り組む活動を行っているという。

また、稲葉・齊藤[2005]によれば、「経済的利益を得られずに帰国することは、それを期待していた家族との間の精神的紐帯の断絶や、地域社会からの差別的な扱いを受けることを意味する」(稲葉・齊藤[2005: 36])ため、「失敗した」帰国者は、出身地に戻っても、日本への経験を誰にも話さなかったり、自宅に引きこもったり、アルコール依存などに陥るケースも多いという。

一方、Pongpaichit [1982=1990]は、バンコクの「マッサージ・パーラー」で働く女性たちを事例に、出身地である東北部・北部の村で、「南行き」(バンコク等で性産業に従事すること)の女性たちに対する村側の反応を調査し、次のように述べている。

「(東北部では女性たちに対する態度が極め

て厳しいのに対し：引用者註）北部では、同情と嫌悪感が複雑にまざりあっている。…北部の人びとの態度は、属する階層によって異なる。教育を受けている中流階級の人びとは、マッサージ・ガールや南へ行った女たちを見下す態度をとるが、貧しい村人たちの態度は緩やかだ。…調査した4村では、村人が南へ行った女性たちに社会的な不名誉というラベルをはりつけてはいないという印象を受けたが、しかし、『敗者』としてもどってきた女たちは村人たちに軽蔑されているようである」(Pongpaichit [1982=1990: 98-99])

Pongpaichit [1982=1990: 101]によれば、北部の村では、女性たちがバンコクの「マッサージ・パーラー」で働くことを、倫理的な問題というよりは経済的問題とみなしているという。村の男性たちへのインタビュー調査では、女性の「南行き」は結婚の妨げにはならないとする回答が多く、結婚後も、経済的な理由がある場合は仕方がないと考えているという。また北部では、女たちの両親への忠節ぶりを賞賛し強調する人々もいたという(Pongpaichit [1982=1990: 100])。

先行研究及び前節の12名の聞き取りからは、日本からの帰国者を迎える村という地域社会の側に、ある共通した視点があることがうかがいあがってくる。すなわち、1) 性産業に従事した可能性のある女性の帰国者に対する偏見と、2) 日本へ行ったにもかかわらずあまり稼ぐことのできなかった「失敗した」帰国者に対する蔑視である。

女性移民が性産業に携わること自体の評価については、地域差や階層による違いはあるものの依然否定的であり、セックスワーカー及び従事した可能性のある女性に対するまなごしは差別的なものであると考えられる。こうしたまな

ごしは、セックスワークそのものによる精神的苦痛に加え、帰国後の女性たちを精神的に追い込んでいる。また、帰国者に対する聞き取りからは、「日本行き＝売春」という図式が村側にあることが見受けられ、実際に性産業に従事したか否かは別にして、女性帰国者一般にこのまなごしは向けられていると考えられる。

また村では、日本への移民に対して多大な経済的期待がかけられる。村側の論理において、「日本行き」は、村の家族のためになされるべきものであり、村に新しい家を建て、親兄弟や子を養い、家族の生活を向上させるものでなければならない。それは「南行き」をはるかにしのぐ期待であると思われる。それゆえ、「失敗した」帰国者に向けられるまなごしは、より一層過酷なものになると考えられる。いわば、当然期待される「日本行き」の「目的」を達成せずに帰国した「敗者」とみなされるわけである。

以上のような、日本への移住労働や帰国者に対する村側の視線に対し、帰国者個人個人は具体的にどのような戦略で、日本への移民経験を語っているのだろうか。次章では、村側の了解図式と帰国者個人の語りとが、どのような相互作用をもつかに着目して、その重層的リアリティを描き出していく。

III. 語りからみえること

前述したとおり、以下では、II.2.で示した12人の帰国者のうち、G (35歳女性)、K (41歳女性)、A (22歳女性) のライフヒストリーの語りを特に分析する。分析は、1) 移動の「動機」に関する語り、2) 「日本での暮らし」に関する語り、3) 「家族との関係」に関する語り、という項目ごとにまとめられ、さらに語り手の語った内容によって、4) 女性帰国者へのまなごしに対する語り、5) 「失敗した」帰国者へのまなごしに対する語り、という項目が付け加えられて

いる。

III.1. Gさん（35歳女性）のライフヒストリーの語り

1965年生まれの女性Gは、4人兄弟の2番目として生まれた。父親は自作農であり、運送業も営んでいた。最終学歴は小学7年で、その後20歳まで両親の農業を手伝っていた。1985年、20歳から2年間バンコクの衣類工場で働き、帰郷して結婚、2児をもうけた。27歳のとき離婚し、1993年28歳で日本へ渡る。愛媛、長野、東京でスナックのホステスや焼肉屋のウエイトレスなどをして6年間働いた。妊娠中に帰国し村で出産。聞き取りを行ったのは、Gの帰国後まもない時期だったが、この後すぐ再び日本へ渡航している。

III.1.1. 移動の「動機」

Gの語りは全体的にしっかりとした自信に満ちたものであった。なにより強調されたのは移動の「動機」をめぐる語りである。彼女は離婚後28歳のとき、香港で家政婦として働きたいと考え、バンコクにある斡旋会社で料理や言語を勉強していた。そのときたまたま飲食店でブローカーに声を掛けられ、行き先を日本へ変更したという。渡航のきっかけはおおよそこのようなものであったが、その「動機」について尋ねると彼女は次のように長々と語った。

旦那と別れたら、自分の借金もあるから。私のお父さんも借金いっぱいある。その時、弟がトラックの事故に遭ったの。友達が死んじゃったの。[……]友達のお父さん[に対する賠償]もぜんぶ借金であるから。その時「お父さん、かわいそうだな」って思ったの。[……]日本へ行くのは給料も高いし、いいなあとと思ったの。[……]子供二人は私が面倒みてる。[母親は]その時ねえ、病気ね、

すごい大変だったの。[……]結局、旦那さんは逃げて全部私でしょう？ だから、大変だったの。運、悪いよね。結婚もね。⁶⁾

別れた夫が残した借金、弟が起こした交通事故、母親の薬代、2人の子供たちの養育費、これらの経済的理由が日本へ行く「動機」の全てであったとGは語る。同時に、自分は娘として両親を助け、母として子供たちを養育しなければならないという意識が強調されている。日本へ働きに行くことは、決して自分のためではなく、家族、特に両親のために、経済的理由から決意したものとして想起されている。

この聞き取りの際に、彼女は既に再度日本へ渡航する決意を固めていた。その「目的」は明確で、両親と自分が住むための新しい家の完成であるという。この家はGからの送金で半分は建てられたが、建設途中で工事が止まっているという。あと半分を建てるために、もう一度日本へ働きに行かなければならないとGはいう。その語りは、日本へ行くことは稼ぐための手段でしかないという枠組みに支配されている。同時に繰り返されるのは、日本へ働きに行くことが、村の家族の生活向上のために、自分を犠牲にした行為であるというリアリティである。また、彼女は機会さえあれば日本人男性と結婚したいとも思うが、それは「自分の好き嫌いじゃなくて、自分のお父さんと家族の生活を考えているから」。結婚も、彼女にとっては「出稼ぎ」の手段と考えられている。

自分の学歴についてのくだりにおいても、彼女は次のように述べている。

学校？[……]みんな勉強[=進学]して、私一人だけ[進学できなかった]。その時まだ貧乏だったからね。[……]すごく悲しかったの。淋しかった、その時はね。[……]今、みんな友達ね、先生とか病院の先生とか学校の先

生とかやっている。すごい幸せになった。
私だけ、まだ大変。

学歴がないために自分だけがまだ苦勞しているという語りは、だからこそ自分は日本へ行かざるを得ないという主張につながっていく。実際に同年代のクラスメイトの大半が進学したとは考え難いが、学歴がないために母国で「先生」などの職につくことが叶わないことも、移動の重要な理由として語られている。

III.1.2. 「日本での暮らし」

Gにとって「日本での暮らし」は、どのような経験として想起されているだろうか。次の送金に関する語りから、彼女のリアリティの断片がうかがえる。

[給料が]18万円になったら、15万円タイに送ったの。自分の生活費[は]3万円くらい。大変だけど、しょうがないから。自分は借金ばっか、お父さんとか、お母さんとか、子供もいるでしょう？ [子供たちの]学校も心配になっちゃったから。

ここでは、日本での稼ぎのほとんどを送金にあて、自分の移住先での生活はできる限り切り詰めてやってきたと語られている。Gが心配し、優先しているのは、移住先での自分の生活ではなく、村の両親と子供のことであった。このような移住先での「出稼ぎ」的な生活スタイルに関する語りは、送金だけでなく、日本語の習得についても聞かれた。Gは焼肉屋でウエイトレスをするに当たって、雇ってもらうためにメニューにある言葉だけを必死に覚えたという。彼女は積極的に日本社会に適応しようとしたのではなく、働くために必要最低限のものに限って受け入れ、それ以上の労は惜しんだと語る。このような「出稼ぎ」生活の語りは、建設労働者

として日本で働いた男性帰国者の間にも見受けられる。例えば、病気や転職などの問題に遭遇したときも、ブローカーか仲間のタイ人労働者に相談して解決し、日本人住民と積極的に交わることはしなかったという語りも聞かれた。いずれも、自分の生活の中心が移住先ではなく村にあるものとして、移民経験を想起しているといえよう。

III.1.3. 「家族との関係」

Gは帰国の理由について述べるくだりで、次のように語っている。

また日本に行きたいの。その時[=帰国した時]まだ、タイに帰りたくないよね。でもお母さん大変だったから。病気なの。すごい大変だったから。[...]私はね、毎週連絡したの。家族にね。電話です。[...]2番目の子供も「お母さん、私、顔みたい。お母さんの顔どんなだかわからないから、帰って帰って」って言うから「うん、そうだね、タイに帰るね」それで、帰ったの。帰ったらまた大変。

Gは毎週、電話で村の家族に連絡を取っていたこと、そのとき子供たちが自分を恋しがって大変だったことを回想している。実際には、彼女は6年もの長い期間、村を不在にしている。しかし、Gによれば、それにもかかわらず、自分と家族とは深い繋がりを維持しており、それゆえ自分としてはまだ働きたかったけれども帰国せざるを得なかった。換言すれば、家族の生計の担い手としても、また母としても、自分が家族に必要とされており、欠くべからざる存在であると主張されているともいえる。

子供たちの教育についても、Gは自分が親としてしっかりと関わってきたことを強調している。彼女が日本にいる間、二人の子供たちは祖

父母の元で育てられた。子供たちは村内の学校ではなく、市街地の学校に通っている。

[子供たちの学校は]「〇〇」だかなんだかな…[学校名を思い出せないでいる]。お金ちょっと高い。[村の学校とレベルが]全然違うですよ。[…]私の考えはね、お母さんもないしお父さんもない、[…]お祖父さんとお祖母さんは[父母のように勉強を教えることが]できないから、[…]やっぱりいい学校じゃないとあんまり良くないなと思ったから、[…]いい学校に連れてったの。ずっとね。

彼女は、村にいないからといって自分は子供を放置しているわけでも、その教育に無関心なわけでもないと語る。むしろ学費の高い「いい学校」へ通わせており、ほかの村の人々に比べ、よりよい教育の機会を子供に提供しているという自負心や上昇志向さえも見受けられる。言うまでもなく、彼女は、子供たちの教育費を稼ぎ出したのは自分の日本への「出稼ぎ」であると、自らの移民経験を捉えているのである。

III.1.4. 女性帰国者へのまなざしに対する語り

ところで、Gが日本での経験を語ろうとしたときの最初の言葉は、「愛媛県へ行ったの。クラブのお仕事ね、『デート』じゃなくてね」であった。「デート」とは、スナックやクラブの店外に客と出掛けることであり、暗に売春を意味している。移民経験を語る際に、彼女が最初に言っておきたかったことは、「自分は売春はしていない」ということだった。例えば「日本でどのように仕事を見つけたのか」という問いかけに対して、次のように答えている。

そこ[=トランプ賭博場]に遊びに行って、紹介した[=された]の。「愛媛県に行きたい

か、行きたくないか」って。「何がお仕事なの？」って言ったらね、「クラブのお仕事ね」「デートじゃないでしょ？」って言ったら「デートじゃないよ」って言うからね、「もしデートだったら私、嫌だから」って言ったらね、「ああ大丈夫よ、デートじゃないよ、中だけね」[…]それ[=デート]は嫌だからね。

仕事を探すにあたって自分がまず注意したことは、それが売春ではないことだったと彼女は語る。そして、そのことを両親に理解してもらうために、彼女はホステスという仕事の内容を両親に事細かに説明しなければならなかったという。村にはスナックやクラブというものがないので、客とカラオケを歌ったり、話をしたり、お酒を作ったりすることがホステスという仕事だということが、両親も村の人々も分からないのだ、と彼女は続けた。

これらの語りは、日本から帰国した女性に対し、村では「売春婦」というレッテルが貼られがちだという事実を示すと同時に、そうした偏見やステレオタイプの理解に対する彼女の戦略をみることができる。彼女はこの後も「自分は売春はしていない」ということを繰り返し語ることになる。

[村では]あまりその話[=日本へ行った話]はしない。私は帰ったら、あんまりどこも遊びに出掛けないの。[今日の祭りも]行かなかったの。[…]田舎だから口がすごいうるさいからね。うるさいっていうのは、[…]例えば私[売春をしていないのは]本当の話でしょう？ でも「日本のお仕事は何？」「焼肉屋で働いていたの」「そんなじゃないよね、絶対男の人とデートじゃない」って言うからね。

こうした心無い陰口に直面し、彼女は村であまり外出せず、陰口をいう人々とは距離をとって付き合っているという。そして、自分の場合は売春をしていないのは事実であると語り、このようなリアリティの齟齬を村の人々の無知に帰している。従って、「売春=悪」という理解の仕方は無傷で残されている。Gによれば、ドークカムタイが「売春婦」の多いことで悪名高いのは、実際に売春をしている「悪い人たちがドークカムタイ出身だと嘘をついているからだ。一方、彼女自身は、家族のために犠牲となって働く「出稼ぎ」労働者であるという形で自らの経験を語っている。

III.1.5. 小括

以上のGの語りだが、1) 村からの視線に対抗して、どのようなリアリティを構築しようとしているのか、そして、2) それが村の視線からはさらにどのように見られるといえるだろうか。

1) Gは、「日本行き=村の家族の生活向上のため」という村側の論理を、そのまま自分自身の移民経験をめぐるリアリティとして保持しているといえる。すなわち、自分の日本での労働経験は家族のための「出稼ぎ」であり、実際に家族の生活向上という「目的」を果たし、「(ひとまずは)成功している」というリアリティを構築している。

2) こうしたGのリアリティは、村の視線と調和的であり、いわば納得できるストーリーである。したがって、この「成功」のストーリーは村内で維持され、また再生産されやすいものと考えられる。しかし、成功の「程度」については、Gは村側の視線にさらされ、齟齬を感じていると考えられる。それは彼女が再度渡航の意思をみせているからである。その齟齬を修正するために、彼女はもっと「十分に」稼いで、「経済的成功者」としての村での地位を確立する方向に向かうかもしれない。

ほかにも、Gのリアリティが村からの視線との間で齟齬をきたすのは、女性帰国者に対して向けられる「日本行き=売春」という図式と直面する時である。Gは、この視線に対抗して、村の人々（時には両親までも）が日本での自分の仕事について理解を示さないのは、彼らが田舎者で、日本や都市の状況について無知だからだ、というリアリティを構築している。一方で「売春=悪」という図式は村側と同様に保持しているため、「自分は売春をしていない」と繰り返し主張したり、ホステスの仕事内容を事細かに説明せざるを得ない。それでもなお、Gは村の人々との間にリアリティの断絶を意識しており、あまり日本での話をしなかつたり、人々と距離をおいたり、という状況に追い込まれている。

以上のように、彼女もまた、現在構築されているリアリティに安住できてはいない。

III.2. Kさん（41歳女性）のライフストーリーの語り

1959年生まれのKは、6人兄弟の4番目として生まれた。両親は土地をもたない日雇い農だった。兄弟のうち下の2人は小学校へ行ったが、Kを含む4人は学校教育を受けられず、K自身は6歳の頃から日雇い農として働いていた。その後10年ほどバンコクで家政婦などをして働いた。1990年31歳の頃、日本に渡り、東京のスナックで6ヶ月間働いたが、ある日本人男性と出会って仕事を辞めた。8~9年間同棲生活を過ごして帰国。その間送金はしていない。現在は、日雇い農をしながら、身体障害を持つ兄とその息子と共に暮らしている。

III.2.1. 移動の「動機」

Kが31歳のとき日本へ行くことになった直接のきっかけは、日本で結婚した友人の誘いであったが、その「動機」については、短く次のよ

うに語っている。

[日本行きは]知らないよ、みんなは。言わなかった。だって昔は色々考えないでしょ。まだ若いからわからないから。年上だけど子供と同じでしょ。何も考えていなかった。行きたい行きたい、見たい見たい、それだけ考えていたから。^⑦

ただ「行きたい行きたい、見たい見たい、それだけ考えていた」。Gが家族の経済的理由を次々と列挙したのに対し、Kはただただ好奇心で、ほとんど計画のないまま渡航したと語る。こうした動機の語り方は、「日本行き」を、家族の生活向上のために稼ぎに行くものとして意味づける村側の了解とは相容れないと考えられる。

III.2.2. 「日本での暮らし」

Kは日本での生活や仕事の経験をどのように語っているのだろうか。

[仕事は]毎日じゃないでしょ。休みもあります。あと元気がないとか、風邪とかも休み。大体仕事やるのは1ヶ月[に]2週間ぐらい。[その他は]家にいるだけ。本を見るとかそれだけ。遊びはできないしょ。お金ないから。6ヶ月が終わって恋人に会った。だからずっと仕事やってない。犬とウサギ、魚、それだけ。だって恋人もお金ないし。おじいちゃんだからね。だから優しい。[その生活が]8年。

Kは日本での生活経験を労働中心のものとしては語らない。彼女の記憶の中心にあるのは、恋人である男性との同棲生活である。日本にいる間、自分が働いたのは最初の6ヶ月間だけで、それも休み休みだったという。「恋人がアルバ

イトしているから自分は何もしていない。[日本での生活は]よかった。だって、日本人、優しいでしょ」。

日本でのタイ人同士の交流についても、「遊びのとき」や「祭り」で「いい友達」になり、おしゃべりしたり、遊びに出掛けたりした、と楽しい思い出として回想され、仕事の情報を交換したり、病気の時に助け合ったりするなどの関係は全くなかったと彼女はいう。

III.2.3. 「家族との関係」

帰国の理由を尋ねると、彼女は村の家族へのホームシックを挙げたものの、すぐに彼女は、日本の恋人への現在の「ホームシック」を語り出した。

[帰国の理由は]みんな、お兄さんとかお姉さんとか、妹とか弟とか会いたいでしょ。顔みたい。[日本滞在が]長いでしょ。…本当は帰りたくないね。日本人は本当優しいでしょ。[…]今、毎週日曜日[日本にいる恋人に]電話する。[…]だから遊び、何にもできないから。自分何も持っていないから。[当時タイへ送金は]全然送ってないよ。[タイの家族との連絡は]たまにだけ。貯金もなかった。

彼女は村へ送金をしておらず、家族との連絡もあまりとっていなかったという。帰国した理由はホームシックだったが、ここで彼女が強調しているのは、むしろ日本の恋人とのつながりである。彼は彼女に送金してくるわけではない。しかし、彼女にとっては毎週日曜日に電話することが非常に重要なこととして語られている。

タイに帰ってきたら苦しいことはあまりなかった。でも困るから。向こう[=日本]にはワンちゃんがいるから。恋人もいるから。

困るね。淋しいね。[生活が苦しいのは]タイ。だって私何も持ってないでしょ。貧乏だから。[日本には]アルバイトがあるよね。仕事すればお金くれるでしょ。[…]旦那さんいないし、子供もいないし。[これからのことは]まだわからない。まだ。お金ないから、どうするかなあ、どうするかなあ、って。[…]今ね、日本も行きたいよ。

Kにとって、恋人がいて犬がいる日本での生活が、村での生活以上に重みをもって語られている。これからの村での生活も、再び日本に行く目処も立ってはいないが、彼女はとにかく日本に行きたいという。その語りにおいて、送金や貯金のためという理由は強調されず、日本で恋人やペットとまた暮らしたいという思いが強調して語られている。家族への送金を目的に日本への再渡航を望んでいるGとは、全く異なるリアリティで「日本行き」が捉えられているといえるだろう。

III.2.4. 「失敗した」帰国者へのまなごしに対する語り

日本で8年以上を過ごした彼女だが、家を新築することもなく、現在も日雇い農として働き、貧しい生活を送っている。帰国後の村の人々との関係について、彼女は次のように語る。

[村では自分に対する陰口が]色々いっぱいあります。だって、うち貧乏だし、みんな「へっ、お金もないし」[と言う]。[…]毎日私ね、遊んでるんじゃないよ。1人でお酒飲む。酔っ払ったら寝てる。[…]あんまり[外に]出ないから、口が悪い人がいっぱいいるから。日本から帰ってきたのに貧乏だったら、やっぱり「お仕事ができない」とか「お金がない」とか「かわいそうに」[と]思ってみんな言うから、それが嫌だか

ら。[…]タイ人ね、馬鹿にするばかり。[…]口だけの「かわいそう」だから、でも心では違うから。

学歴もなく、もともと貧しかった彼女だが、日本に行った後も、現在まで貧しい生活のままである。彼女のような送金しない移民は、村においては蔑視の対象であることが彼女の語りからうかがわれる。同情にみせかけた蔑みの視線は、彼女が移民として「無能」であり、稼ぐことのできなかつた「敗者」であるという烙印を押す。彼女は、このような烙印を語りの中で強く拒否している。すなわち、日本での暮らしがいかに楽しく、充実し、満たされたものであったかを説明し、語るのである。しかし、このような彼女の対抗的なリアリティは、村の文脈では全く評価されず、無視されると考えられる。彼女は、村の人々の「馬鹿にするばかり」のまなごしに憤りながら、意義あるものとして、日本への移民経験のリアリティを構築しようとしている。

III.2.5. 小括

1) Kは、「日本行き＝村の家族の生活向上のため」という村側の論理に対して、対抗的なリアリティを構築しようとしている。それは、「日本での生活そのものが楽しく充実していた」というリアリティである。すなわち、お金はないが優しい日本人の恋人やペットに囲まれ、必要なときにだけ働き、重労働もなく簡単にお金を得、その日その日を楽しく暮らしていた、という移民経験のリアリティである。

2) こうしたリアリティの構築の仕方は、村側の了解においてはまるで納得できるものではない。時間を惜しんでめいっぱい働き、送金して、村の家族の生活向上を図ることを「日本行き」の「目的」と意味づける村側の了解においては、Kの移民経験は単なる「失敗」と見なさ

れ、彼女の構築しようとするリアリティは、おそらく「敗者」の「戯言」としか響かず、「言い訳」にすら聞こえないと考えられる。Kの構築する移民経験のリアリティは、彼女自身に対して村の人々がとる態度のように、「馬鹿にされ」、「無視され」、全く意義を与えられないと考えられる。

III.3. Aさん（22歳女性）のライフストーリーの語り

1977年生まれの女性Aは、6人兄弟の末っ子として生まれた。両親は自作農であり、その手伝いをしながら小学校を卒業したが、14歳のとき両親は農地を手放すことになった。13歳のとき、彼女はバンコクでクリーニング業を営む親戚のもとで働くため、村を出た。3年間バンコクで暮らし、カラオケ店や売春宿などでも働いた。村の家族には当時から収入の一部を送金していた。1992年15歳で日本へ渡航。初めの1年2ヶ月間は、栃木県で過酷な管理売春に耐えた。恋人の日本人男性と脱出した後は、長野県などでウエイトレスやホステスとして働いた。定期的に送金しながら、日本には6年2ヶ月間滞在し、帰国。立派な家が村に建っていた。現在は両親と兄、姉、本人の5人で暮らしている。

III.3.1. 移動の「動機」

Aが移民経験を語る時最初に述べたのは、「だまされた」という言葉であった。15歳で日本へ行くことになったきっかけは、バンコクでブローカーから勧誘されたことであったが、彼女はそのときのことを次のように語っている。

騙されたんですよね。日本に行って大変だったよ。[バンコクで]「日本に行ってみないの?」とか誘われた。よくあんまり知らない人だけだね。[…]「マンションでメイドさんやるのは、給料高いよ」って。「月

で10万、15万くれるよ」って。いいなあと思って。[親戚のクリーニング店を辞めた]そのあとは友達と知り合って[…]カラオケなんか夜の町で働いていた。もう最初から入る道が間違えていたんですよ。もうずーと夜の仕事を続けて。まあ、あんまり良くない仕事よ。⁽⁸⁾

日本で彼女を待っていたのは家政婦の仕事ではなく、過酷な管理売春であった。彼女にとってそれは極めて不本意なことだったと彼女は語り、「だまされる」までの一連の過去——バンコクで、世話になっていた親戚のクリーニング店を辞め、カラオケ店やスナックなどで働き出したこと——も、「入る道が間違えていた」と後悔と共に想起されている。しかし同時に、彼女は移動の「動機」を次のようにも語っている。

[日本へは どうして行こうと思ったのですか?]理由はない。ただ、行ってみたいな、遊びに行ってみたいな、ただ、それだけなんです。前はね、「桜? 花? どんないだろう」、みんなが言う通りきれいなのかな、行ってみたいな、見たいな」と思った。昔は行くの、簡単なんです。[…]あと、雪!

「ただ日本に行ってみたい、見てみたい」という好奇心に満ちたリアリティは、彼女の「動機」をめぐる語りの中で宙に浮いているように感じられる。それはひとつには、「だまされた」というリアリティが語りを強く支配しているためであろう。実際には、両親は日本への渡航に反対したため、彼女は家族に黙って日本へ渡り、到着後に連絡をした。村の人々にも知られずに渡航したものの、毎月家族へ送金したために、自分が日本で働いていることがすぐに村中に知

れ渡ってしまったと彼女はいう。

III.3.2. 「日本での暮らし」

Aにとって日本での暮らしは、言うまでもなく、非常に過酷な経験であった。

やってた仕事はねえ、最初だけ1年くらい、やって…。あんまりよくない仕事。売春[を]やって。騙されて。騙されたから。最初はメイドさん[と saying it to]全然違うじゃないですか。最初はね、[…]宇都宮。あるんですよ、アパートみたいなのがね。タイの人ばかりで[…]みんなは同じ、騙されて。[パスポートなども]自分は持ってない。[…]帰ることも出来ない。お金もないでしょ。[…]初めはね、半年で[帰ろうと思っていた]。でも駄目だったんですよ。[借金を返すのに]私はね、1年2ヶ月くらいかかった。470万円。すごいでしょ。

最初の1年2ヶ月は、帰国することはおろか、外出する自由もなく、巨額の「借金」の返済に追われる日々であった。当時、自分の生活費は月2万5千円の食費だけで、多いときは20万円、少ないときでも15万円は村の家族に送金した。

しかし、日本での暮らしは「過酷な経験」ばかりではなかったと彼女はいう。管理売春下から逃げ出した後、彼女は恋人の日本人男性と共に新たな生活を始めた。彼女にとって日本滞在中の経験でおそらく重要であったことのひとつは、その恋人との関係であったと思われる。そのころの生活について、彼女は次のように語る。

長くいるから、言葉なんかも少しわかるでしょ。[…]友達とあそこから出て、[…]日本人と付き合ってたからその人の名前でアパート借りたの。後はアルバイトですよ。[…]日本人と恋人になったらあちこち連れ

て行くでしょう？ あと1人で行けるから。[日本での生活には]いいことがありますよ。日本はいいとこだから。[悪いことは]ない、全然。[…]悪いところあるのは外国人の人間で問題を作るでしょ。[日本での経験は]私にとってよかったと思う。日本人の男性もいい人もいますでしょう？ 悪い人もいます。でも私はいい人ばかり[出会った]。

ここでは彼女にとって、恋人をはじめ周囲の日本人との関わりも一定の重みをもって語られているといえる。ところが、このような彼女にとって個別的に重要な経験は、村側の目には入りにくいと考えられる。日本人男性の中には、悪い人もいますが、いい人もいたという彼女の語りは、III.3.4.で後述するように、村の人々には理解されにくいのである。

III.3.3. 「家族との関係」

彼女は帰国することを決めたときのことを、次のように回顧している。

もう働くところ、お店ないし、お店はもう10軒ぐらい働いたわけね。[…]で、タイ大使館に行って、もう「帰ります！」って言って。ホームシックになったんですよ。いつも、いつもいつも我慢してた。「お金いっぱい稼げたらもう帰る！」[と]思っていた]。みんなのために家族のためにも、自分のためにも。

ここで語られる移民経験のリアリティは、家族のためにこれ以上我慢はできないということまで我慢した、という切迫したものである。彼女は自らの移民経験を「成功の物語」としては語っていない。彼女のリアリティにおいて、移民経験は稼ぐための期間として意味づけられてはいるが、同時に、稼ぐためだけに限界まで

我慢することへの苦しみ、あるいは違和感が湧いて出ている。

再び日本に行こうと考えているかという問いに対し、彼女は「思っていない。ちょっと…諦めて。疲れたんですよ。ずーっと…。農家でもいいや、自分のとこだったらね。違うところは本当に…。[家族も行くようには]言わないですよ。『もう、どこにも行かないで』って」と答えている。「疲れたんですよ。違うところは本当に…」という語りは、彼女が移民経験を極めて過酷なものとして想起していることをうかがわせる。一方で、「農家でもいいや、自分のとこだったらね」という語りは、「自分が苦勞して支えた家族」や「故郷」として、家族や村を感傷的に想起することを、むしろ拒んでいるように思われる。管理売春という過酷な状況に耐え、「苦勞」して出稼ぎに「成功」した「孝行娘」あるいは「被害者」というステレオタイプに、彼女の移民経験を流し込んでいこうとする村側の文脈に対して、彼女は違和感を押し殺した沈黙へと誘われている。

III.3.4. 女性帰国者へのまなざしに対する語り

Aのように「成功」した女性帰国者に対して、暴力団組織と関係した「悪いこと」をして稼いできたとみなすまなざしが、村側にあることが次の語りからわかる。

「日本でもいい男はいるよ」[と言うと]、「悪い男性がいるよ、ヤクザが一番怖いよ」とかね。ここの周りにも一人あったんですよ。日本に行ってなんか頭がね…おかしくなってきた。日本人に暴力[をふるわれた]。「だから日本に行ってお金はそんなにあるんだろう、新しい家なんか作って」[と言われていた]。[…]みんな言いますよ。「あの家の娘は日本に行って悪い商売している」とかね。そう言う人もいっぱいいる

けど[自分は]興味がない。何か言ってきて[も]知らないふりして。あんまり良くないから。

こうしたまなざしに対し、彼女は「だまされた」と繰り返し説明するか、沈黙するかのどちらかを余儀なくされてしまう。また、日本で出会った「いい」男性のことをいくら説明しても聞き入れられないという。

しかし、一方では、彼女は日本から帰国した女性が家を新築することについて、次のように語る。

[皆]同じですよ。日本に行ってきた女性はね、絶対自分の家を綺麗に、高く建てる。誰だってね、外国まで行ってきたからいい家建てたい。綺麗な家建てたい。

コンクリートの新しい家は、彼女たちが移民する目的であると同時に、移民したことを価値あるものとして意味づけるシンボルでもある。それは、稼いだ手段は何であれ、村側の社会に「成功者」あるいは「孝行娘」として自らを呈示するものである。Aは、このような無視することのできない村側のまなざしを利用したり、抵抗したりしながら、自らの移民経験のリアリティを構築しようとしていると考えられる。

III.3.5. 小括

Aの語りから、Aに対する村からの視線は、いくつかあることが浮かび上がってくる。すなわち、「家族の生活向上」という「目的」を果たし、うまくやってのけた「成功者」あるいは「孝行娘」という視線。さらに、管理売春の「被害者」であるという視線。そして「売春」をしていた者に対する蔑視である。

こうした村側のまなざしに対して、A自身の移民経験をめぐるリアリティは複雑である。視

線の圧力によって、分裂を余儀なくさせられているといってもよいかもしれない。

第一に、1) Aは、自らが管理売春の「被害者」であると自己呈示しつつも、それだけには取まらなれない移民経験のリアリティをもっている。例えば、管理売春から逃げ出した後の、恋人であった日本人男性や「いい人ばかり（出会った）」という記憶がそれである。

2) しかし、このリアリティは、「日本で悪い人たちと、悪いこと（売春）をして稼いでいた」とする村側からの視線に直面し、沈黙を余儀なくされる。こうした視線に対抗するためには、「悪い人たち」にだまされた「被害者」としての自己呈示をさらに強化せざるを得ない。そうすることで、また彼女は違和感を飲み込むのである。

第二に、1) Aは、立派な家を立て、家族の生活向上を果たした「孝行娘」として、そして「日本行き」の「成功者」として、自分をみなそうとする村側からの視線を、強く意識していると考えられる。その賞賛の裏側には妬みや羨望があり、語りからも彼女がそれらを感じていることがうかがわれる。

こうしたまなざしに対し、Aのリアリティは、自らの移民経験を単純に「成功」と意味づけるものにはなっていない。むしろ、消極的にはあるが、「成功者」・「孝行娘」としての評価や、自分が支えるべき「家族」あるいは「故郷」として、家族や村を感傷的に想起することを、拒んでいるように思われる。家族のためにはいえ、限界まで我慢したと感じ、「農家でもいいや、自分のとこだったらね…」と溜息混じりに語る彼女のリアリティは、決して村側の視線と調和的ではなく、ある意味で批判的とさえいえる。すなわち、管理売春という想像を絶する過酷な状況による送金をも、結果的に認め、賞賛し、羨望する、村側の「日本行き」に対する期待や了解に対して、Aは違和感を抱いていると

いえるのではないだろうか。管理売春と分かちがたく結びついている彼女の移民経験のリアリティは、村では語ることも理解されることもないということ、彼女は諦めとともに感じているのではないだろうか。

2) このような彼女の語りがたいリアリティは、村側の視線からは、まず見えないといっているだろう。「孝行娘」・「売春婦」とまなざす村側の視線の狭間で、彼女のリアリティは語られる場さえもたない。たとえ語られたとしても、村側の視線からは、単なる「成功者の苦労話」と見なされるか、「悪い女」として非難に曝されるか、「可哀想に」と同情されるかのいずれかであるだろう。実際には大抵は、「日本行きに成功した孝行娘」という文脈に流し込まれると考えられる。

一方で、Aは、自分自身のリアリティとの齟齬を感じながらも、同時に、村という地域社会においては、「日本行きに成功した孝行娘」としてしか自らの移民経験が意味づけられないことをよく知っているため、そのように自己呈示せざるを得ない。例えば、彼女にとって、村に立派なコンクリートの家を立てることは、当初「日本行き」の目的であったかもしれない。しかし同時に、帰国後の彼女にとっては、村の人々に対する自己呈示そのものでもあることが語りからうかがわれる。立派な「家」は、村の人々には理解されないあの苦しい移民経験を、唯一、共有可能な形で意味づけるものだからだ。

以上のように、Aの移民経験をめぐるリアリティは、村側のまなざしによって絶えず揺さぶられ、語りは断片化し、違和感を押し殺した沈黙へと誘われているといえる。

IV. 語りの文脈とリアリティ構築の戦略

三人の女性による移民経験の語りから、そのリアリティが移住先の社会との相互作用だけでなく、村という出身の社会との相互作用として

も構築されていることが確認される。

Gは、村側の「日本行き」に関する了解をそのまま日本社会での生活に持ち込み、いわば異邦人として暮らそうとしたといえる。彼女の日本での暮らしは、村の家族への送金のために可能な限り切り詰めたものであり、また日本社会への適応努力も最低限しかしていなかった。

それゆえ、Gの語りの文脈は、村側の「日本行き＝村の家族の生活向上のため」とする文脈と違うことなく、淀みなく進んでいく。彼女は自らを「よき娘（母）」として、「自らを犠牲にして」働いた「出稼ぎ者」であるというリアリティを構築している。そのリアリティは、村側の理解と調和的であるため、反復され、より一層確固としたものになってゆくと考えられる。とはいえ、彼女はまた、成功の「程度」について村側の了解との齟齬を感じているためか、再渡航の意思を語ることで、一見安定しているそのリアリティを保留しつづけている。

これに対して、KとAは、「日本行き」に関する村側の了解とは異なる生活を日本社会において築こうとしていたといえる。Kは、1ヶ月に2週間しか働かず、送金もせず、恋人の男性に養ってもらう生活であり、時間を惜しんでめいっぱい働くというような「出稼ぎ」的な村側の了解とは全く異なる生活をしてきた。一方、Aは、管理売春という、来日前には想像もできない過酷な「労働」を強いられた。逃げ出した後は、アルバイトに精を出しつつも、彼女に親切だった日本人男性と遊びに出かけるなど、楽しい日々も過ごしている。

このように、KとAは村側の理解を超える生活を築いていた、まさにそれゆえに、村側の了解とのせめぎあいが生じてしまう。村側の了解においては、Kの経験は「出稼ぎの失敗」としてしか認識されない。帰国した彼女が直面した村側の視線は、送金しなかった移民に対する「無能」・「敗者」というまなざしであった。こ

れに対して、彼女は対抗するリアリティを構築しようとしている。それは、（労働ではなく）日本で出会った恋人との暮らし自体を主題とし、その日その日を楽しく過ごしたという移民経験のリアリティである。しかしこの語りは、村側の文脈では価値のないものとして馬鹿にされ、無視されていく。そのため、Kの心の内には、「敗者」というまなざしに対するやりようのない憤りが蓄積されていくのであった。

一方、Aの経験は、村側の了解においては、出稼ぎに大成功した「孝行娘」・「成功者」というまなざしで迎えられる。またその裏返しとして、妬みや羨望から「売春婦」として蔑視されたり、管理売春の「被害者」として哀れみの視線にもさらされるのであった。これに対して、彼女は対抗するリアリティを構築しようとしているが、彼女の語りは断片化し、違和感を押し殺した沈黙へと誘われている。例えば彼女は、自分の出会った日本人男性の中には親切な人々もいて、楽しいこともあったと村の人々に説明するが、「ヤクザばかりだろう」、「悪いことをしていたのだろう」と一蹴されている。彼女が構築しようとしたリアリティ——彼女にとって個別的には重要であった「いい人」たちとの出会い——は絶えず揺るがされ、その記憶はほとんど語られることはない。

また、彼女は、ある場面では、「成功者」という村側の物語に自ら乗りながらも、別の場面では、こうした村側のもつ一定の了解の型に自分の移民経験が流し込まれることに対して抵抗しているといえる。「孝行娘」・「成功者」という村側の了解は、彼女のあの過酷な「労働」経験を意義あるものにしてけると同時に、その実態をよく理解しないままに肯定し、賞賛し、犠牲を強いるまなざしでもある。彼女は「成功者」というリアリティをもつこともなく、こうしたまなざしに対してむしろ違和感を覚えているが、これを語ることは困難である。彼女は自

らの移民経験のリアリティが、村側の了解と齟齬をきたしていることに気づいており、それゆえ彼女の語りは、語るほどに断片化してゆき、口を閉ざしがちになるのであった。

移民経験をめぐるリアリティは、移住先の社会との相互作用としてまず構築される。この三人の女性も、実際に日本社会でそれぞれ異なる経験をし、異なるリアリティをもって帰国したに違いない。

だが、本論文で明らかにしたように、それはさらに村という出身の社会との相互作用として構築され直す。帰国した移民たちは、「日本行き」に対する共通した村側の視線に直面する。本論文で特に浮き彫りになったのは、「日本行き」を村の家族の生活向上のための「出稼ぎ」と捉え、帰国者を「成功者」と「敗者」に分け、移民女性を「売春婦」として蔑んだり、「被害者」として哀れむまなざしであった。

本論文では、こうした村側の視線に対抗して、

三人の女性が独自の語りを展開し、あるいは展開できないことによって、彼女らと村との間で移民経験のリアリティが構築されている様子を描写出した。すなわち、Gの語りが村側の了解と調和的で揺らぎが比較的少なく、一旦構築されたリアリティが強化されていく一方、KとAは、「日本行き」に関する村側の了解とは異なる生活を日本社会において築いていた、まさにそれゆえに村側の了解とのせめぎ合いが生じ、KとAはそれぞれ、それに対抗する語りを構築しようとしているのであった。しかし、そうすることで、常に「あの移民経験が一体何であったのか」を説明することを余儀なくされ、その圧力の中で、彼女らが構築しようとしたリアリティは絶えず揺るがされ、語りが断片化していったり、違和感を押し殺した沈黙へと誘われる。このように、出身の社会との相互作用としても、移民経験をめぐるリアリティは重層的に構築されているといえる。

註

1. 2000年タイ国籍者外国人登録者の総数2万9,289人のうち、女性2万1,523人、男性7,766人である(雨宮他[2002: 23])。
2. 総面積1万9,633ライ (31平方キロメートル)、人口5,747人。11の村 (muubaan) からなる。以下では、簡略化のため、行政村を「村」とよぶこととする。
3. 聞き取りのための主な現地調査は2000年2月と8月に行われた。調査は、ある帰国者から雪だるま式に、同じ行政村内の帰国者や国内の移動労働経験者を紹介してもらう方法をとった。このときの調査で出会った国内外の移動労働経験者は31人であり、そのうち日本からの帰国者は12人であった。この31名に対し、「生い立ち」、「移動までの過程」、「移動先での労働と生活」、「帰郷後の労働と生活」、「現在の状況と今後の意向」の5項目を中心に、ライフストーリーの聞き取り調査を行った。なお、本文中で使用される年齢などのデータは調査当時のものである。聞き取りは、調査者とインフォーマントが日本語で直接話す場合と、タイ人通訳を介して英語とタイ語で行う場合があり、1人1~2時間を要した。後述するG、K、Aの3人は調査者が日本語で直接聞き取りをした。インタビュー内容は録音し、後日書き起こした。本文中での引用文は全てこの書き起こしからの引用である。引用文中の[...]は中略、[]は筆者による補足または註、…は話し手の沈黙を示す。
4. タイの小学校教育は1960年に4年制から7年制になり、義務化された。その後1977年に現在の6年制になった。尾中[2002: 34-35]参照。
5. 「タイ-日移住女性ネットワーク (Self Empowerment Program of Migrant Women: SEPOM)」のこと。
6. Gさん (35歳女性) へのインタビュー (2000年2月16日) より引用。以下、III.1.の引用は全て同じ。

7. Kさん (41歳女性) へのインタビュー (2000年2月18日) より引用。以下、Ⅲ.2.の引用は全て同じ。
8. Aさん (22歳女性) へのインタビュー (2000年2月18日) より引用。以下、Ⅲ.3.の引用は全て同じ。

文献

- 雨宮昭一(他)(2002)『国際結婚におけるタイ人女性の現状』茨城大学地域総合研究所。
- Caouette, Therese and Yuriko Saito (1999) *To Japan and Back: Thai Women Recount their Experiences*, Bangkok: International Organization for Migration.
- Castles, Stephen and Mark J. Miller (1993) *The Age of Migration: International Population Movements in the Modern World*, London: Macmillan. =(1996) 関根政美・関根薫(訳)『国際移民の時代』名古屋大学出版会。
- Glick Schiller, Nina et al. (1994) *Nations Unbound*, Amsterdam: Gordon and Breach.
- 広田康生(1997)『エスニシティと都市』有信堂。
- 法務省大臣官房司法法制部(2003)『出入国管理統計年報2003年版』。
- 稲葉奈々子(2002)「日本におけるタイ人女性」雨宮昭一(他)『国際結婚におけるタイ人女性の現状』茨城大学地域総合研究所, 21-39.
- 稲葉奈々子・斉藤百合子(2005)「心身に深い傷を負う被害者たち」『部落解放』548: 28-37.
- Massey, Douglas S. et al. (1998) *Worlds in Motion*, Oxford: Clarendon Press.
- 奥田道大(他)(1994)『外国人居住者と日本の地域社会』明石書店。
- 尾中文哉(2002)『地域文化と学校：三つのタイ農村における「進学」の比較社会学』北樹出版。
- Padermchai, Pocharawan (1995) *Labour Out-Migration and its Socio-Economic Impact on the Community in Dok Kham Tai District, Phayao Province*, Chiangmai: Graduate School of Chiangmai University.
- Pongpaichit, Pasuk (1982) *From Peasant Girls to Bangkok Masseuses*, Geneva: International Labour Organization. =(1990) 田中紀子(訳)『マッサージ・ガール：タイの経済開発と社会変化』同文館。
- 斉藤百合子(2004)「タイに帰国した女性たちの課題」吉田容子(監)JNATIP(編)『人身売買をなくすために：受入大
国日本の課題』明石書店, 57-69.
- 鈴木規之(1994)「欲望の循環」小野澤正喜(編)『アジア読本タイ』河出書房新社, 255-260.
- 田嶋淳子(1998)『世界都市・東京のアジア系移住者』学文社。
- 山本真鳥(1996)「移民社会とホームランド：サモア移民の経験」青木保他(編)『移動の民族誌』岩波書店, 127-157.

受稿2006年6月23日／掲載決定2006年9月27日